

家族内性愛に関する研究

(分担研究：小児の健康と養育条件に関する研究)

荒堀憲二*, 番内和枝**

要約 昨年、一昨年と家族内性愛 (Incest) の実態を調査したが、今年度は母子Incest誘引の一つになっていた親子の共同入浴状況を知るため、600名の高校生を対象にアンケート調査を行った。

その結果、

- 1) 男子生徒の50%が母親と入浴するのは5.6才まで、父親とは6.6才までであった。
50%以上の男子が精通を経験する12.3才では、母と入浴する子は1.6%、父と入浴する子は3.0%であった。
- 2) 女子生徒の50%が母親と入浴するのは9.1才まで、父親とは6.6才までであった。
50%以上の女子が初経を経験する11.8才では、母と入浴する子は16.3%、父と入浴する子は1.3%であった。
- 3) 精通、初経の累積経験率から見ると、男子は女子より早く両親から離れて入浴していた。
- 4) 一方12才以上の男子で母親と入浴している者が10人、11才以上の女子で父親と入浴する者が8人いた。

思春期における無邪気な親子の密着 (Forwardの第一のタイプ) は、何らかの誘引を契機にIncestに進展する可能性がないとは言えない。今後さらにこのような実態と事例の情報を集積する必要があると思われた。

見出し語 Incest、家族内性愛、親子の密着、親子入浴

はじめに 家族内性愛は、対人関係の「歪」の際だったものと考えられ、その実態を調査し分析することは、家庭における養育機能や人間関係のあり方に示唆を与えるものと考えられる。初年度はこれらの実態調査として、児童相談所およびモデル電話相談所での資料収集、事例調査を行い、父-娘関係および母-息子関係について報告した。その結果

- 2) 父親は性格的に問題が多く、怠惰で酒癖が悪く乱暴であった。
 - 3) 母親はIncestを黙認する傾向が強かった。
 - 4) 娘は長女が多く、自尊感情が低く愛情欲求が強かった。娘の非行や妊娠が発見の糸口になっていた。父に対して受容的な子もいた。
- 昨年度は電話相談所において、さらに対象、項目を広げて家族内性愛の実態を調査した。その結果、

- 1) 貧困で相談者のいない核家庭に発生し易い。 1) 全体で249例の回答を得、そのほとんどが思

* 羽島市民病院産婦人科 (Dept. of OBST. & GYNEC., Hashina City Hospital)

** 国立公衆衛生院母子保健学部 (Dept. of Maternal and Child Health, The Institute of Public Health)

春期男子からの相談であった。

2) 家族内性愛のパターンは、母-子、義母-子、兄弟-姉妹、義兄弟-姉妹、叔母-甥が認め3) 性交に至った者が約7割を占め、誘引はマスターベーションに関するものが44%と最も多く、入浴や旅行もあった。

4) 相談者の半数以上は自分の行為を否定的にとらえていたが、被害者意識を持つ者はいなかった。

5) 家族内性愛の発生した家庭では、同胞が少なく母-子関係では父親不在の家庭が多かったが、経済状態、精神身体状況等に特徴的な傾向は認められなかった。

以上の結果より、入浴や旅行、ベッドの共有などincestを誘発しやすい行為が、何才くらいまでどの程度行われ、タブーとされる限界はどの程度なのかを知る必要があると考えら

れた。そこで今年度はIncest誘発の1因ともなっていた、親子の入浴についてアンケート調査した。

研究目的 Forverd分類のIncestタイプ1の頻度を調査する。

調査対象 地方小都市の2高校 1-3年生、男女各600人

調査内容 精通、初経年齢、父親・母親との入浴年齢（何才まで一緒に）。

調査時期 平成3年6月と平成3年8月に性教育講演会前に各学校で実施。

結果

1) 初経・精通の累積経験率 (図1)

50%の女子が初経を迎えるのは11.8才であり、50%の男子が精通を迎えるのは12.3才で、累積経験率のグラフは全国調査のものと同様であった¹⁾。

図1 精通・初経累積経験率

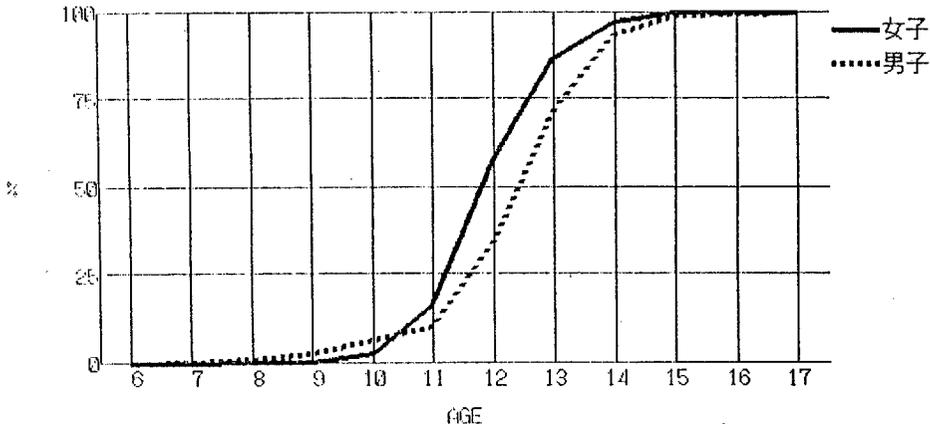


図2 親子入浴終了年齢 男子生徒

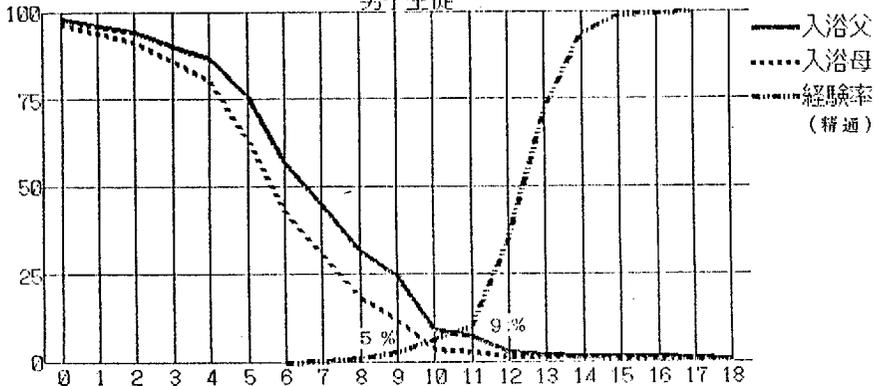


図3 親子入浴終了年齢
女子生徒

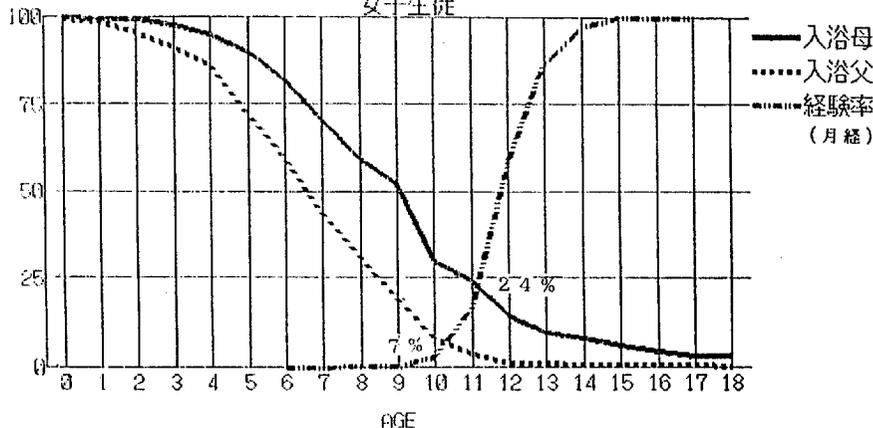
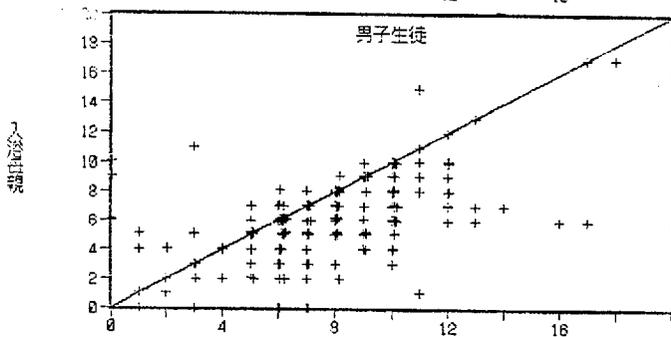
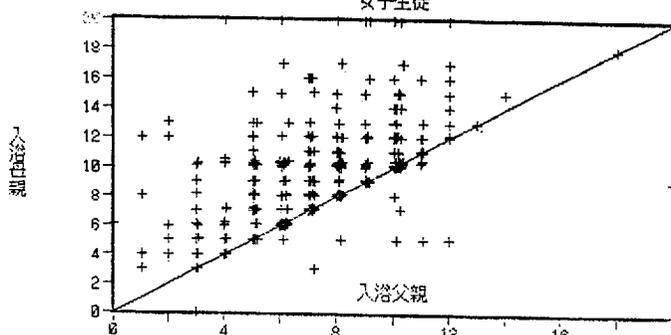


図4 入浴終了年齢 (歳)
女子生徒



入浴父親

2) 入浴終了年齢 (図2-4)

1. 男子生徒の50%が母親と入浴するのは5.6才まで、父親とは6.6才までで、50%以上の男子が精通を経験する12.3才では、母と入浴する子は1.6%、父と入浴する子は3.0%であった (図2)。

2. 女子生徒の50%が母親と入浴するのは9.1才

まで、父親とは6.6才までであった。50%以上の女子が初経を経験する11.8才では、母と入浴する子は16.2%、父と入浴する子は1.3%であった (図3)。

3. 精通の累積経験率のカーブと、父母との入浴終了年齢のカーブがクロスするのは、父母各々9%、5%であり (図2)、初経の累積

経験率のカーブと父母との入浴終了年齢のカーブがクロスするのは、父母各々7%、24%であった(図3)。よって精通・初経の累積経験率から見ると、男子は女子より早く両親から離れて入浴していたと言える。

4. 一方12才以上の男子で母親と入浴している者が10人、11才以上の女子で父親と入浴する者が8人いた(図4)。

考察

母-息子IncestをForwerdは3つのタイプに分けている²⁾。第1は性的交渉もなく、同じベッドで寝るとか一緒に入浴するといった無邪気なタイプである。第2はマスターベーションの手伝いをするなどの性的接触のある場合、第3は定期的な性交のある場合である。第2、第3のタイプはタブーの壁に阻まれ情報が得難いため、第1のタイプについてアンケート調査した。今回検討した親子の入浴に関しては他に比較する研究がないが、結果の4)に示したようなグループについては、次のような事例もあり注意が必要である。

事例は、性や婦人科疾患に関する電話相談によせられた46才の主婦からのもの。

「高校生の一人息子との間に子供ができた。夫の子として生みたいが、息子との性的な関係も切りたくない。これは異常なことか」。家族構成は一人息子との核家族で夫は単身赴任中で、息子とは中学まで一緒に入浴していたが、高校に入ってやめていた。しかし夫の赴任により寂しくなると、再び一緒に入浴するようになった。週末に帰る夫とsexはあると言う。

このように、Forwerdの第一のタイプであっても、思春期に入っておれば何らかの誘引を契機に第2、第3のタイプに進展する可能性があると言えよう。核家族化、少産少子化、父親の単身赴任などの社会情勢の変化による潜在的母子家庭の増加は、そのような誘引につながるのかもしれない。今後ともわが国におけるこのような実態と事例の情報を集積する必要がある。さらにクロスカルチュラルな研究も必要だと考える。

総括

母子Incestが欧米では極めて希とされ³⁾、電話相談で届けられたものも女性あるいは少女が被害に会うIncestである⁴⁾。一方わが国でも父娘Incestは深刻な問題を抱え、しかも児童相談所の調べでは⁵⁾昭和58年1年間の報告件数と昭和63年の6カ月間の報告件数が同じで増加傾向を示していた。しかし電話相談に見られた母子Incestの当事者である男子は、被害者として相談してくるのではなく、自分のタブー行為に困惑しながら援助または共感を求めている。父娘Incestと母息子Incestの最も顕著な相違は、前者では男が女を一方的に利用したり搾取するパターンなのに対し、後者ではアタッチメントの延長のような印象を受けることである。

わが国では伝統的に母子を一体とみなし、母子密着を容認する傾向が強いと言われる⁶⁾が、このような文化的社会的背景が大きく影響しているものと考えられる。これに対し、夫婦を中心とし子供は早くから自分の部屋を与えられる欧米の家庭では、母子密着は実際面でも理念においても起こり難い状況と言えよう。まして広い浴室や深い浴槽を持たない欧米の家庭では、初経や精通を迎えた子が、親と一緒に(異性であれ同性であれ)入浴するなどということは、ほとんど起こり得ないことと言える。

Incestのような密着は、幼少時期からのアタッチメント的な行為と何らかの関連を持つのか、持たないのかといった検討は親子の関わり方を考える上で非常に重要な意義を持つ。早期のアタッチメントの重要性は今更言うまでもないが、Incestについても、早期の父娘のアタッチメントやeffective fathering、effective motheringが父娘Incestを予防すると言われる⁷⁾。しかし、アタッチメントはその後セクシュアル・アタッチメントに変化することも考えられ、ながすぎるアタッチメントは問題が生じる可能性がある。ながすぎるか否かの線引きは容易ではないが、二次成長の開始時点を一応のめどに、遅くとも初経や精通の開始時点では、親子の密着という状態は

卒業して、性的な自立に向かっているべきだと思われる。

本研究を通じて、多様なIncestがわが国にも存在し増加傾向にあること、欧米より高頻度に思春期の男子が関係する（義）母子Incestが存在することが明らかにされた。ただし（義）母子Incestの与える影響については、情報が少なく妊娠以外確認が出来なかった。またその背景も、わが国における母子密着の土壌やながすぎるアタッチメント、いくつかの誘引のなどが仮説として想定できたに過ぎない。しかし性的な自立は、健全なアイデンティティーの完成のために必須のものである⁹⁾ので、さらに詳細なIncestに関する調査研究が必要である。

提言

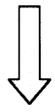
Incestが存在する事実を明らかにし、当事者（被害者）が思春期電話相談などに安心して相談できるような環境作りが望まれる。電話相談での（義）母子Incestあるいは兄弟姉妹Incestについては、その場でのカウンセリングが望まれる（本研究を通じてテレフォン・カウンセリングのマニュアルを考案したので、表1に主な項目を紹介した）。また人間同志の関わりは、家族と云えども性を抜きにしては語ることが出来ず、Incestも含めた人間の性に関する積極的な啓蒙が益々必要である。

文献

- 1) (財)日本性教育協会編：中学・高校・大学生の性行動白書。小学館，東京，1988。
- 2) Foward, D., Buck, C., 佐藤亮一訳：近親相。河出書房新社，東京，1976。
- 3) Rist, K.: Incest: Theoretical and clinical views. Amer. J. Orthopsychiat. 49:680-691, 1979.
- 4) Russell, D.E.H.: The incidence and prevalence of intrafamilial and extrafamilial sexual abuse of female children. Child Abuse & Neglect. 7:133-14, 1983.
- 5) 児童虐待：昭和58年度全国児童相談所における家族内児童虐待調査を中心として（委託調査研究報告）：日本児童問題調査会，1985。
- 6) 全国児童相談所長会議事録：全児相（通巻第47号）47-74, 1989。
- 7) 川名紀美：密室の母と子。潮出版，東京，198。
- 8) Parker, H. and Parker, S.: Father-daughter sexual abuse: An emerging perspective. Amer. J. Orthopsychiat. 56:531-549, 198.
- 9) Rinsley, B.D., Rinsley, C.: Incest: Its developmental and familial context. Seminars in Adolescent Medicine, 3:9-1, 1987.

表1 電話相談でのIncestへの対応

1. Incestとは
2. incestの種類
3. incestの受け止め方
4. 対応
 - イタズラ・作話について
 - 相談者のタブー意識
 - 情報の取り方・フレック°イト
 - 援助の最終目標
 - 面接への誘導
5. 関連機関との連携の可能性について



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 昨年、一昨年と家族内性愛(Incest)の実態を調査したが、今年度は母子 In cc st 誘引の一つになっていた親子の共同入浴状況を知るため、600 名の高校生を対象にアンケート調査を行った。

その結果、

- 1)男子生徒の 50%が母親と入浴するのは 5.6 才まで、父親とは 6.6 才までであった。
50%以上の男子が精通を経験する 12.3 才では、母と入浴する子は 1.6%、父と入浴する子は 3.0%であった。
- 2)女子生徒の 50%が母親と入浴するのは 9.1 才まで、父親とは 6.6.才までであった。
50%以上の女子が初経を経験する 11.8 才では、母と入浴する子は 16.3%、父と入浴する子は 1.3%であった。
- 3)精通、初経の累積経験率から見ると、男子は女子より早く両親から離れて入浴していた。
- 4)一方 12 才以上の男子で母親と入浴している者が 10 人、11 才以上の女子で父親と入浴する者が 8 人いた。

思春期における無邪気な親子の密着(Forward の第一タイプ)は、何らかの誘引を契機に Incest に進展する可能性がないとは言えない。今後さらにこのような業態と事例の情報を集積する必要があると思われた。